女性の幼少期からの暴力被害経験と家族

お茶の水女子大学大学院　杉野衣代

1　目的

欧米では、家庭内で起こる様々な暴力被害経験を個人のライフコースという視点から研究することが通常であるが、日本では特定の暴力に細分化されて研究されていることが指摘されている（Kumagai，2016）。このような状況を受け、本報告では、ある女性が幼少期に家族から受けた虐待被害だけでなく性差別経験や、成人し婚姻後の現況に対して彼女自身がどう意味付けているかに焦点を当てて分析することを目的とする。

2　方法

報告者は、2015 年に約 2 ヶ月強の間母子世帯向けシェア住居へ住込み、DV 被害を受けて配偶者の元から逃れて来た女性（以下、「A」）とともに生活するという調査を実施した。なお、葛西・室崎（2015）は、母子世帯向けシェア住居をはじめ、育児・家事・介護等の生活課題を非血縁者が共に住まい共同化して解決を目指す住まい方を「ケア相互補完型集住」と称している。

本報告の特色は、このように非血縁者同士の共助が期待される住まいにおいて調査を実施したところにある。そのため、報告者は研究者でありながら一居住者でもある存在として、A の抱える課題を共有し解決するための相互作用の相手方の一人として調査を実施した。こうした調査の中で蓄積した A との会話、起こったできごとや感じたこと等の筆者の経験の記述が主な調査内容となっている。

3　結果

結果の一部は以下のとおりである。A の語りによると、父親は、母や A、兄弟姉妹を殴るという DV と児童虐待の加害者であった。さらに、この父は、母や A を女性であるが故に差別的待遇をする主体でもあった。また、A は父から植え付けられたこのような価値観に父と離れて暮らす現在も捕われ、幼少期に母と A には許されなかったある行為を現在も自分にはできないことと認識していた。さらに、A は父から受けた虐待は現在でも自らの身体に後遺症として刻まれていると語っていた。

4　結論

自己の虐待経験や生育家族をめぐる A の語りによると、父親が A に及ぼした影響が大きいことが分かった。彼女は、離家し婚姻した現在も幼少期の虐待被害や性差別の影響から逃れられていない。このような状況から、A の現状を考察するには、幼少期からの経験を彼女がどのように捉えているかを含めて検討することが重要であることが示唆された。

文献

Kumagai, F. and M. Ishii-Kuntz,(eds).(2016).*Family Violence in Japan　A Life Course Perspective*. Singapore: Springer.

葛西リサ・室崎千重（2015）「ケア相互補完型集住への潜在的ニーズの把握と普及に向けた課題-地域に住み続けるためのケアと住まいの一体的供給の可能性-」『住総研研究論文集』No.42、191-202 頁。

杉野衣代（2017）「シェア住居において生活再建を試みる DV 被害者の生活実態」『人間文化創成科学論叢』第 19 巻、255-263 頁。